蔵前の保姆養成所をたずねて

――初期の保育者養成――

土屋とく

四章　検証

浅草区教育会の古い記録の中から蔵前の養成所といわれていたのは、実は東京府教育会教員養成所が浅草家政女学校を教場としていたものであることが明らかになった。

この章では初期の保育事情を参照しながらその事実の裏付けを行っていきたいと思う。

未だいくつか残されていた疑問点もこうした操作をすすめる過程で自ずから解消されていくであろうから…。

一、幼稚園の設立と保育者の需要

衆知のように近代的な教育としての幼稚園の設立は、明治九年官立の東京女子師範学校(現在お茶の水女子大)附属幼稚園が始りとされているが、続いて同十一年に修業年限一年の保姆養成所が同校に開設される。

しかし募集を開始したが入学を希望するものは少く、止むを得ず十三年には本校の生徒に幼児保育法を課して小学校教員と併せて保姆の資格を与えることとし、この保姆練習科は一旦廃止された。

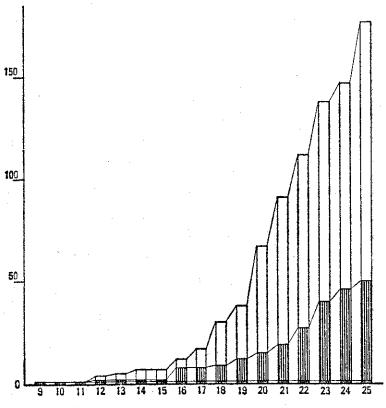
同校の卒業生は人材の乏しい各地の幼稚園に指導的役割を担って赴任したが、十年代の保育者養成は概ね見習い方式でその数も少なかった。

明治二十年に入るころから新しい教育に対する諸事情も漸く落着きをみせるようになり、幼稚園への認識も次第に浸透して公・私立の幼稚園の設立が急に増えてくる。それはいうまでもなく保育者を求める声の高まりでもあった。

その頃の全国幼稚園の増加の推移、又教員数の増加をグラフに表わすと図1、図2(次ページ)のようになる。

国立の幼稚園は明治末年迄一園のまま据置かれるが、東京では各区の公立の小学校に幼稚園が次々と附設されるなど公・私立の幼稚園の設立と保育者の増加が著しい。

「幼稚園」というものに対して一般の人々の理解がすすむ迄若干の時日を要したのは、いくつかの理由が考えられる。



第1図　全国幼稚園数の推移
(明治9年～25年)
(百年史教育統計より)
上段：公立　中段：私立　下段：国立

それまで我が国には幼児教育を独立の機関で行うといった考え方は無かった。

江戸時代の幼児教育に関して〝心ある人々の子弟は家庭内に於て、或は寺子屋に於て、相当早い頃から教育を受けていた。寺子屋の主としたところは少年期から青年期にかけての教育で、その中から幼児期だけの独立した教育機関を取り出してみることは出来ないが、事実上は幼年期の者がかなり多数ここで教育された。またその教

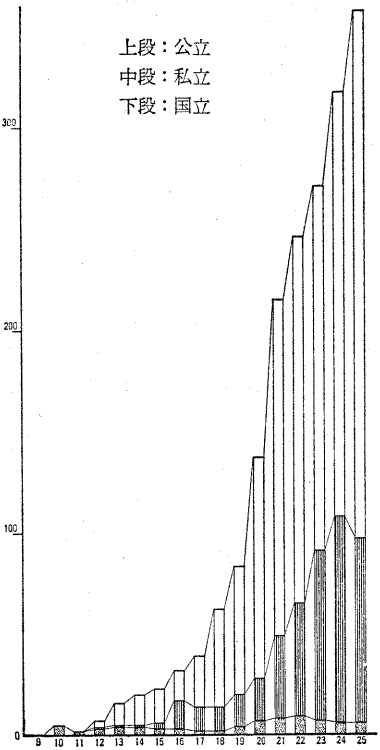
科目に織込まれているものの中には、幼稚園の創立期に主として用いたところの保育科目に似通っているものが少くない。例えば折紙、絵画、手工、談話があり、教え方も一斉教授をさけて一人々々に適した方法を取ったこと等を見れば、寺子屋という一般教育機関の一部に幼児期の教育機関が含まれていたということが出来る。〃（東京市の教育　昭和十二年二十四頁）

更に寺子屋から近代的学校教育への転換に際し、

〃明治五年学制頒布の当時、東京府に於ては先ず東京市を六大区に分け各区に一校づつ六つの小学校を設立した。尚続いて各区の寺子屋を公立小学校に改め、各区長をして寺子屋の師匠に説かしめて其の儘公立小学校教師として生徒と共に公立小学校の方へ収容するというようなことが諸方に行われた〃（帝都教育会六十年史　三十四頁）とある。

明治十七年文部省が特に「幼児は幼稚園の方法により保育すること」と通達を出していることは、近代的教育制度の普及定着までにいろいろな混乱や混同が、かなりあったことを物語るものとして興味深い。

当時としては欧米にならって新しく導入された幼稚園に対して、最初のうちは物珍しさといささかの抵抗が父兄の間にあったであろうが、一旦その真意が理解されてくると今度は我も我もと希望者が増加して、定員上断るのに苦労する事態まで起きたという。



第2図　全国教員数の推移（明治9年～25年）

二、教育会と短期の養成

以上のような状況を背景として、新教育の普及、改良、進歩を図るべく先覚的な人々の手によって結成されたのが教育会という組織である。学事に直接関係のある者、また教育に対して特に篤い志を持つ者とが相計って事態に処すべく官民一体の協力体制を作ったのである。

創立の当初は東京府教育談会と称し、二十一年に東京府教育会と改められたが、役員として名を連ねている人の身分は文部省や府の役人、小学校長、民間の有力者である学務委員、区会議員等である。活動内容は主に啓発のための有識者による講演会、現教員や補助教員講習会、機関誌の発行その他であったが、中でも会経営の教員養成所の開設は特筆すべきもので、同年芝区芝公園地内の芝麻布共立幼稚園に附属の保姆講習所が先ず設けられる。次いで小学校教員速成伝習所、家事専科伝習所、英語教員伝習所が開設され毎年多数の卒業生を送り出していった。

創設時の保姆講習所の設置願いや規則から伺える目的は、「幼稚園保姆に必要なる学科即開誘法諸遊戯及び唱歌等を修めんとする者の為に専速成を主として之を設く(授く)」とあるように、短期間で現実的要望に応えようとするものであった。

講習期間は六ヶ月

授業時間は毎日三時間以内通常学校授業時間外

講習員は左の二項の一に該当するもの

一　幼稚園保姆若しくは小学校教員及授業生の職にある者

一　年令十八年以上四十年以下身体健康品行端正にして相当の学力を有するもの(設置願いは尋常小学科卒業以上)

授業料は一ヶ月一人五十銭

学科課程は、開誘法六　遊戯法二　唱歌三—単音—実地授業一

修了者には証明状が出され、有効期限は五年であった。

教員は二名とあり、東京女子師範学校附属幼稚園で保

育を五年経験し、講習所が置かれた芝麻布共立幼稚園々長であった近藤浜が指導のイニシャチブをとったようである。

届出文書にある設立者木寺安敦は京橋区の学務委員で教育会の幹事でもあった人である。

この講習所は現在の竹早教員養成所の祖であり近々創立百周年を迎えようとしている。長い歴史の中には幾度か規則を変え、内容の向上充実が行われているし、また途中で休所、再開、統合を経験しているが、都市紀要、東京の幼稚園には〃幼稚園保姆の出身校は明治三十二年の記録文書では二十名近い者のうち、この時はじめて東京女子師範学校が後退し、東京府教育会附属保姆伝習所が進出していることが注目された〃と記されている（一三四頁）。

そして創設以来大正期を経て昭和二年三月迄の保姆科卒業生数一九三三名、七年では二八四〇名の人材を世に送り出している。この多数の卒業生は東京府下は勿論、各地方、朝鮮、満洲（現中国）方面にも分布就職したという。

三　教場の移動

これ迄調べてきた資料には教場についての記述が少く、大正期に於ける移動は直接文京区小石川の竹早教員養成所で確認するのが最良の方法であると思われた。

幸い前出の蔵前幼稚園長の五月女氏が所長の小山昌一氏と親しい友人ということで、紹介の労をとって下さることになった。

連絡の行き違いからここでまたしばらく時が流れてしまうが、五十九年七月漸く実現。昔の事を良く御存知の事務の方と共に小山所長のお話を伺うことが出来た。その際御好意で養成所の九十年史を頂戴する。

この記念誌には創立以来の詳細な記録が載っており、果してその六十五頁に明らかに「大正八年四月に浅草区蔵前の浅草家政女学校内に一時教場を移した」とあり、講師の大森乙五郎氏の「私の授業は毎週火木両日午後四時から二時間宛でした。生徒の意気込はたいしたもの

で、一言半句も聞きおとすまいとして眼をみはり、耳は兎のように、到底想像出来ぬ程の熱心さでした」というその頃の学生の授業態度をつぶさに語っている文が、その頁に併せて読み取れたのである。

以下教場の移動を中心にすえて記録を引用してみる。

○創立時の保姆講習所は前述した通り芝麻布共立幼稚園内。

○翌二十二年には東京市神田錦町和楽堂に移る。

因みに同年小学校教員速成伝習所が京橋区木挽町東京商工会議所で六月開所式、八月に教場を京橋区泰明小学校に、九月に宝田小学校に移る。二十四年仮りに神田区錦町私立錦美小学校に於て裁縫伝習所開き二十五年に家事専科教員伝習所と改称、二十八年麹町区飯田町稚松小学校に移転。

○保姆講習所は一時休止していたが、三十四年保姆伝習所として東京府第一高等女学校の校舎を借用して開かれる。家事科も同所に移り、小学校科は府立第四中学校に開設。

○四十年神田区錦町一つ橋幼稚園に一時閉鎖を経て再開。

所長は東京府女子師範学校教諭堀田要三郎氏を依嘱

○大正八年四月に浅草区蔵前の浅草女学校

所長は平田華蔵氏　十年十一年の所長は高橋清一氏

○十一年四月から教場を教育会の事務所と共に小石川区竹早町の東京府女子師範学校内に移す。

十二年より所長は女子師範校長、竜山義亮氏、――この年九月　関東大震災――

○大正十四年東京府と東京市が合併され、東京府教育会は社団法人帝都教育会と改称。会長は貴族院議員伯爵、松平頼寿氏就任、教員養成所は同会の附属として経営が移ると共に名称も変更される。

昭和二年に所長は竜山氏より師範学校長　田中一元氏になる。

養成所は竹早町に移ってからは、なかば公立扱いを受け、所長は女子師範学校長が代々兼任。講師陣も師範学校の教員が多かった。実際の運営は師範附属校の主事ま

たは教諭が当り、経済面は独立採算制をとった。

明治・大正期に教場が度々移動するのは、教育会という組織の附属として運営されていた関係上仕方が無い事情があったと考えられる。なぜなら教育会は有志による営利をこえた教育的熱意によって支えられていたもので、会の運営や養成所の経営はその時々の役員がそれぞれ責任を分担し合って事の処理に当っていた。したがって私立の幼稚園、区立小学校、府立や私立の女学校等役員の所属する教育機関によって事務所や教場の移動が行われたとみるべきであろう。

半公半民の協力体制は、多くのプラス面をもっていると同時に現実には種々の難しい問題をも抱えていたのではなかろうか。

帝都教育会は昭和十八年都制実施により、東京都教育会となり養成所も同会附属保姆伝習所と改称。(この年府立師範は国立になる)

敗戦後教育会は戦争協力団体として解散を命じられ、全国組織としての帝国教育会や東京都教育会の下部組織に当る浅草区教育会など皆同じ運命を辿ることになった。

だが伝統のある教員養成事業は、東京師範学校同窓会が経営を引継ぎ、更に学制改革によって学芸大学同窓会へと継承された。

三十二年学校法人竹早教育養成所として新校舎落成、今日につながるのである。

これで殆ど検討も終ったと思われたが、小山所長より大正時代の同校の卒業生で現在評議員でもある後藤いく様を紹介される。

四　あのころのこと——後藤様談——

いく様は大正八年三月に東京府教育会附属保姆伝習所を卒業されている。生年は明治三十年で現在八十九才である。お耳が多少御不自由であるため、お話は断片的な部分もあるが、若い頃の記憶の中からいくつか伺えたことを左に記す。

・出身校は神田の東洋家政女学校である。
・伝習所は神田錦町乾門のところの音楽堂で三百坪程の板の間があり、そこが教場であった。蔵前の事は知らない。
・講義は午後四時から二時間の講義、その後二時間の実技があり八時迄であった。
・予科と本科があり、半年・一年の両コースがあった。これは入学前の学歴による。
・校長は堀田要三郎氏　所長は高木四郎氏
音楽担当は最初丸山先生　その後大和田愛羅先生（女子師範音楽担当）
巌谷小波先生は講師として話を聞いた事がある。
・卒業後は大阪に行き、大阪日々新聞の社会部長をしていた橋爪せみろう氏が宝塚に〝家なき青空幼稚園〟を作り、その先駆的活動に感動、協力した。
・大阪小浜村の住吉神社境内に絵馬堂があり、その柱のある一間で大正十二年にこども達四十人位を集め四月から九月初めまで保育した。その間父兄の大工さんがバラックを建てるなどしたが、関東大震災が起り、大迂回をして漸く東京に辿りついた。
・橋爪氏の友人であった後藤隆氏―夫君―は大阪広瀬のよしだやに児童文化協会を設立、赤い鳥運動と呼応して児童運動を活発に行った。〝こどもの家〟発刊　童画家の岡本帰一氏が絵を描いていた。
・この頃は幼児教育の夜明けの時で、新しい音楽などは仙台や神戸のキリスト教関係から普及した。
・小学校の校長先生等と協力して遊戯会を開いたり、大阪船場小学校で幼・小協同してラッパの蓄音器で水曜日に二時間勉強会をした。
・その他、大和田愛羅先生や久留島武彦、北原白秋、野口雨情、水谷八重子など二時間程話して下さった。しかし御高齢でもあり、また何十年前の事柄について伺うのは難しい点が多かった。

以上のことから最後迄残されていた疑問に就ても、ほゞ解答が出されたといって良いであろう。

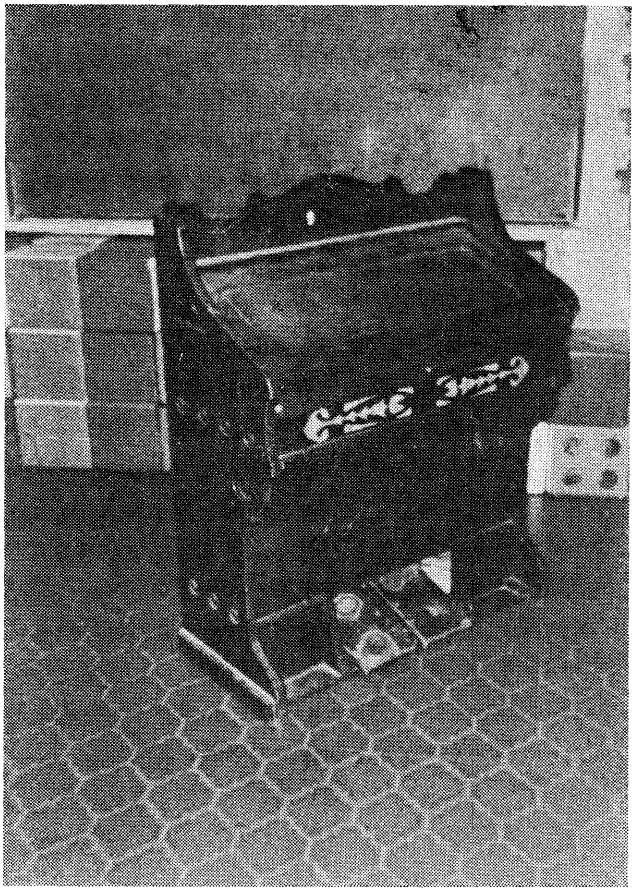
A入学条件について

原則として高等女学校ということであったが、これも予科本科によって修業年限の巾が設けられ、幼児教育に対して向学の志ある者には特例として門戸を開放していたと思われること。

B通学期間

二ヶ年通ったというのは所定の在学期間にくらべ長期にわたっているが、明治後期の東京女子高等師範学校保育実習科の規則にも第五条に〝修業年限は四ヶ月以上二ヶ年以内とす〟とあるようにかなりの余裕を認めていたと予想される。昼間勤務した後の養成であるため当然このような措置が必要であったと思われるのである。

C校長、講師については教育会主催の講演会、講習会、特別講義の機会が豊富に用意され勉学には恵まれていたのであろう。



むすび

保育室に置かれた古いオルガンから、ある保姆養成所

を尋ねる旅は始った。

長い旅であった。

「昔のこと」と一言で捨て去ってしまえばそれで済むことであったかも知れない。しかし数十年前、多田タメノ様が十代半ばの若さで毎日遠い道を徒歩で通った学校の事を懐かしく想い出され、その頃の事を追憶なさったことに対して、何か応えなければならないという気持が強く私を支配した。

いくつかの糸をたどり、その先が途切れ、また気を取り直して他の糸をたぐるといった作業が続き、何度か放棄しようとした。

だが途中で投げるより好奇心が持続したというべきか、かすかな手がかりから古い文書を見つけることでこの課題は解決に進んだ。

それは青天の霹靂のように一度にすべてが明るくなったといってよい瞬間だった。

幻の養成所は幻ではなく確実に存在し、しかも幼稚園史の中で大きな足跡を残す教員養成所のまさに借りの姿だったのである。

迷い、導かれ、知り、多くの人との出合いがあった。何も言わないオルガンは昔のすべてを知っていたのかも知れないが……。

（貞静保育専門学校）

参考文献

○幼稚園教育百年史　文部省　一九七九年

○お茶の水女子大学百年史　百年史刊行委員会　一九八三年

○東京市地籍地図帖　東京都公文書館蔵

○東京市学務兵事課　東京都公文書館蔵

学事　市立学校　第一種の一七

○帝都教育会六十年史　東京都教育会　一九四四年

○東京教育資料大系第八、第九巻

東京都教育研究所　一九七四年

○東京市の教育
東京市役所　一九三七年

○都市紀要一四　東京の幼稚園
東京都　一九六六年

○近代日本教育制度史料　第三五巻
大日本雄弁会　講談社　一九五九年

○近代文学研究叢書　第三五巻
昭和女子大学　一九七二年

○浅草区誌　下巻
区誌編集委員会　一九一四年

○浅草区誌
浅草区役所　一九三二年

○浅草蔵前史
蔵前史刊行会　一九五八年

○弓町本郷教会八十年史
弓町本郷教会　一九六六年

○教員養成九十年
竹早教員養成所のうつりかわり
竹早学園　一九七九年